

第4章 福島大学の合宿型討論会によるルーブリック共同開発 -ルーブリックの説得性の担保に着目して-

西村 君平 (広島大学)

呉 書雅 (広島大学)

1. はじめに

今日の我が国の高等教育における主要な評価方法の一つとして、ルーブリックを用いたパフォーマンス評価を挙げることができる。

パフォーマンス評価とは、「ある特定の文脈のもとで、様々な知識や技能などを用いながら行われる、学習者自身の作品や実現（パフォーマンス）を直接評価する」ことである。大学教育では、パフォーマンス評価は、例えばグループワークを用いた演習、専門職教育における実習、卒業論文等、様々な形で行われてきた一般的な評価方法である。

ただし、これまでのパフォーマンス評価の多くが個々の教員の主観に委ねられており、評価の妥当性や信頼性について少なからぬ議論の余地が残されてきたのが実情であった。この問題の解決に寄与すると期待されているのが、ルーブリックである。

ルーブリックとは、「パフォーマンスの質を評価するために用いられる評価基準のことであり、1つ以上の基準（次元）とそれについての数値的な尺度、および、その内容を証明する記述語からなる」（松下他 2013）。

学習者に対してどのようなパフォーマンスが求められているのか、複数の基準で明示化するとともに、それぞれの基準についての段階を設定することで、評価にあたる教育者は、自らが評価しようとする内容について自覚し、その教育学的な意義や社会的背景との関係性を精査することができる（妥当性）。また基準・尺度・記述語を複数の教員で共有して評価に当たることで、評価のバラつきをコントロールすることができる（信頼性）。

ルーブリックを用いたパフォーマンス評価が注目された背景として、2012年に出された中教審答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」を挙げることができる。同答申では、知識伝達型の教育からパフォーマンス習得型の教育への転換が求められており、授業においても学生の能動的な活動を通じた学修を重視したアクティブ・ラーニングの発想を重視することが打ち出されている。これにより、従来、大学教育の伝統あるいは常識に則って無自覚的に行われてきたパフォーマンス評価は、政策的な裏付けをえて、高等教育における主要な評価の一つとして認知されることになり、その方法論的な精緻化が議論の遡上に上がることになり、ルーブリックが一躍注目されることになった。

確かに、学生の能動的な学修を引き出すことは重要であり、その成否を確認するために

ルーブリックを用いたパフォーマンス評価は有益である。しかしルーブリックを開発しさえすれば、パフォーマンス評価が滞りなく進むというわけではないだろう。

ここではルーブリック開発の際の留意点として、そこに記載された基準や尺度、記述語が、教育の実践を担う教員や教員と協働して自らの成長を実現する学習者たちにとって、意味のあるものとなっているか、という論点を挙げたい。一般に、社会調査の調査結果には普遍性が期待される。学術的・社会的に意味のある指標を用いて（妥当性 *validity*）、バラつきの少ない測定方法によって（信頼性 *reliability*）、知識を創出することが肝要である。他方で、評価の場合、評価結果には妥当性と信頼性に加えて、関係者に対する説得性（*credibility*）が期待されることになる（*Scriven, 1980*）。

例えば、学生に「就業力」を身につけて欲しいと考えている教員がおり、「就業力」に関するルーブリックを大学当局が作成したと考えてみよう。教員が「就業力」を「社会にとって価値のある事業や製品、サービスを生み出す力」と捉えているとする。他方で、ルーブリックを開発した大学当局は「就業力」を「就職面接を乗り切る力」と捉えているとしよう。この時、大学当局が開発したルーブリックがいくら「就職面接を乗り切る力」を確かに捉えていようとも（妥当性）、誰が何度評価しても「就職面接を乗り切る力」について同一の結果が出されたとしても（信頼性）、その結果は授業を担当する教員にとって大きな意味を持たない。

このようなルーブリックの関係者に対する説得性の担保という論点について、我々に示唆を与えてくれるケースとして、福島大学の合宿型討論会によるルーブリック共同開発を取り上げる。合宿型討論会とは、アカデミア・コンソーシアムふくしまに参加する大学の教員、職員、学生が一堂に会し、一泊二日の時間をアカデミア・コンソーシアムふくしまの目指す人材像である「強い人材」とはなにか議論を深め、協働的にルーブリックの開発を行っていく試みである。この過程を通じて、大学教員や職員、更には学生たちが、強い人材についての理解を共有し、あるいは互いに批判的に検討しあうことで、関係者にとって意味のあるルーブリックを開発し、それにより大学間連携事業をさらに活性化させ、その教育効果を向上させることが意図されている。

本調査では、合宿型討論会を管轄する福島大学地域連携担当副学長小沢喜仁教授（地域創造支援センター長、国際交流センター長）、アカデミア・コンソーシアムふくしまの立ち上げにおいて重要な役割を果たした福島大学元副学長、清水修二特任教授、本連携事業への協力教員として合宿型討論会の企画・実務を担う、総合教育研究センター高森智嗣特任准教授にヒアリングを行った。以下では、福島大学およびアカデミア・コンソーシアムふくしまのプロフィール、合宿型討論会の背景、ルーブリック共同開発の過程と実際、合宿型討論会によるルーブリック共同開発の意義と課題について整理・考察を進めていく。

2. 対象のプロフィール

福島大学は、福島県福島市に所在する国立大学法人であり、学生定員 3060 名、452 名である（平成 26 年 5 月）。学部構成は人文社会学群・理工学群に大別される。前者は人間発達学類・行政政策学類・経済経営学類、後者は共生システム理工学類からなる。

アカデミア・コンソーシアムふくしまは、福島大学に事務局を置く、福島県の大学・短期大学・高等専門学校・短期大学校からなるコンソーシアムである。所属機関は、会津大学・いわき明星大学・奥羽大学・郡山女子大学・日本大学工学部・東日本国際大学・福島学院大学・福島県立医科大学・放送大学福島学習センター・会津大学短期大学部・いわき短期大学・郡山女子大学短期学部・桜の聖母短期大学・福島学院大学短期大学部・福島工業高等専門学校・福島県立テクノアカデミー郡山・会津・一浜となっている。

合宿型討論会は、文部科学省大学間連携共同教育推進事業の補助を受けて運営している「ふくしまの未来を拓く『強い人材』づくり共同教育プログラム」を単位として開催されている。

3. 合宿型討論会の背景

(1) アカデミア・コンソーシアムふくしまの経緯とその位置づけ

アカデミア・コンソーシアムふくしまは、元々は福島県高等教育協議会の後継企画である（図 4-1）。福島県高等教育協議会は、平成 10 年に発足している。当時はコンソーシアムが高等教育会において盛んに取り沙汰されていた時期で、福島県においても、コンソーシアムづくりが検討され始めていた。

当時、福島大学の副学長を勤めていた清水氏は、福島県高等教育協議会および初期のアカデミア・コンソーシアムふくしまの取組は非常に停滞しがちであったと振り返る。流行に乗る形で始めたコンソーシアムは、連携の核となる事業がなく、各大学も「乗り遅れたら大変かもしれない」といった漠然とした危機感に引きずられた消極的な参加に過ぎなかったという。連携に際して必要になる大学間の利害調整においても、参加大学からは「福島大学から利用されているだけではないのか」という疑念すら浮上したという。

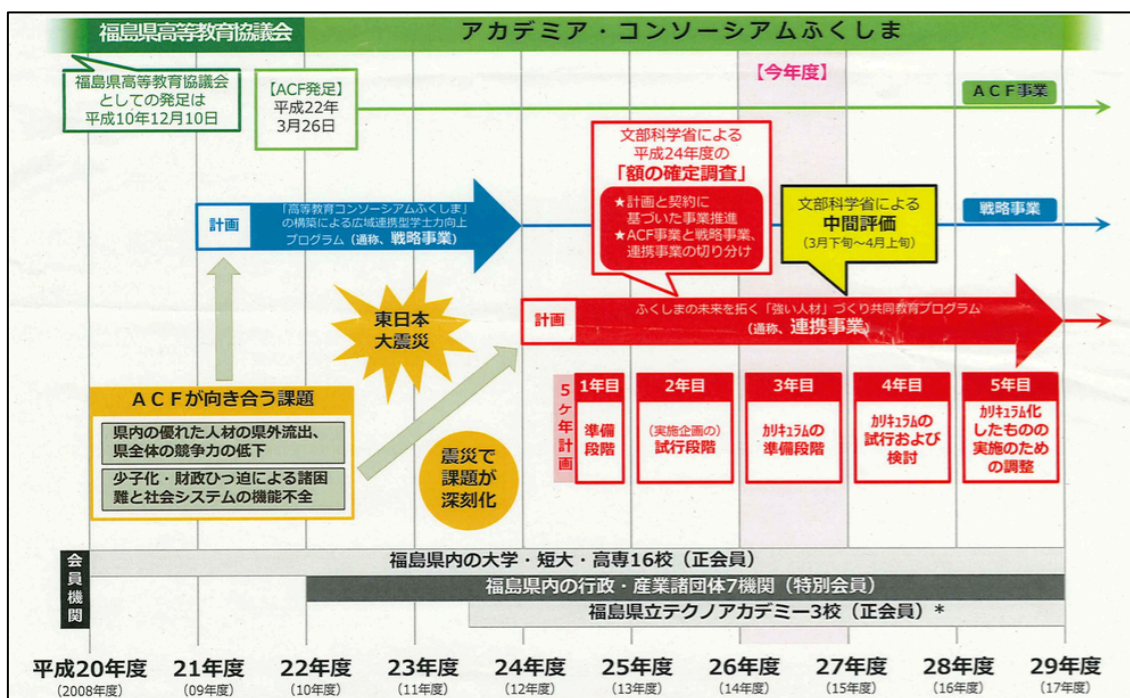


図 4-1 アカデミア・コンソーシアムふくしまの経緯と位置づけ

出典：当日資料より。

そのような停滞ムードの中で、東日本大震災が起きることになる。これにより、各大学は学生減少という共通の危機を抱えることになり、コンソーシアムについての積極性が醸成されることになった。清水氏は震災を奇貨として、各大学の連携を深め、福島県の復興と発展に向けて貢献していくために、コンソーシアムの成功に今でも尽力している。現在ではアカデミア・コンソーシアムふくしまは、各大学の教育改革のモデルケースづくりの場としての位置を与えられ、様々な取り組みが進められている。ルーブリックは、アカデミア・コンソーシアムふくしまにおいて複数実施されているモデルケースを評価するための基礎となることが期待されている、と高森氏は考えているという。

(2) アカデミア・コンソーシアムふくしまの構成

進行中のプログラムは「ふくしまの未来を拓く『強い人材』づくり共同教育プログラム」であり、「地域の産業諸機関との連携でのおすすめのモデル的教育プログラム」「逆境を逆手にとった『強い人材』の育成、「大学生が発信する入学前教育」「グローバル教育推進プログラム」「開かれた内部質保証システムのモデル開発」の5つから構成されている（表 4-1）。今回の合宿型討論会は、5つめの開かれた内部質保証システムのモデル開発の一環である。

コンソーシアムが共同で実施する教育プログラムにおいて、教育目標をルーブリックの形に落としこみ、それをもって内部質保証にあたるという取組は、現今の高等教育の動向からすると、自然ななりゆきであると言える。しかしそれをあえて合宿型討論会の形で実

施する点に、アカデミア・コンソーシアムふくしまの取組の特異性がある。

表 4-1 アカデミア・コンソーシアムふくしまの構成

プログラム名	内容
地域の産業諸機関との連携での下ですすめるモデル的教育プログラム	<ul style="list-style-type: none"> a. 「あえてたいへんなことをさせる」教育プログラムの開発・実施 b. 地域産業界のニーズに沿った卒業研究やゼミナール活動 c. 地域との連携にもとづいた現場実践教育の推進 d. 就職活動のストレス対策
逆境を逆手にとった「強い人材」の育成	<ul style="list-style-type: none"> a. 災害復興をテーマとしたエリアキャンパス・プログラム b. 災害ボランティア活動を通じた学生の教育 c. 「福島学」から「福島復興学」への展開
大学生が発信する入学前教育	<ul style="list-style-type: none"> a. 大学生が発信する高大連携 b. 学生とともに行う科学技術教育 c. 「ふくしまの大学」のバージョンアップ d. 県内合同大学説明会の開催 e. 放射能の状況・対策に関する情報発信
グローバル教育推進プログラム	<ul style="list-style-type: none"> a. ショートステイコース実施による日本人学生のグローバル教育 b. 留学生受け入れ態勢の整備 c. 「外国人が来る」福島のための海外向け広報 d. National Association of Foreign Student Advisers への参加
開かれた内部質保証システムのモデル開発	<ul style="list-style-type: none"> a. 地域の期待を反映した学修成果の設定 b. 学修の基盤となる初年次教育プログラムの開発 c. 人材育成を担う「教職協働」体制の高度化

出典：当日資料より筆者作成。

(3) 福島大学における合宿の文化

一体どのような経緯で合宿型討論会は生み出されたのか。実務面を担当する高森氏によれば、合宿型討論会のモデルは、福島大学における FD 合宿にあるという。FD 合宿の発端は、平成 14 年度に遡る。当時、まだ FD という概念も今日ほど一般的ではなかった頃、新しいカリキュラムの開発方法やその授業案の作成過程を取り上げた内容の濃い FD 合宿が実施された。この FD 合宿は予想を上回る盛り上がりを見せ、福島大学におけるキャリア教育の核となる「キャリア形成論」誕生の継起となった。小沢氏は、この FD 合宿が一つの「成功体験」（小沢氏）として大学に共有されたことで、教育改革の要所要所において合宿を行うことが、福島大学の伝統になったのではないかと回顧している。また合宿系の企画は、

学生のリピート率も高く、学生間のピアサポートの場としても機能しているという。

今回の企画は、高森氏が福島大学の合宿の文化を活かし、さらに対象を学生や連携校の教職員にまで広げる形で企画したものである。また高森氏のみならず、総合教育研究センターの丸山和昭准教授も共同で企画にあたるなど、合宿の開催に向けて、同学の高等教育部門が協働で企画・運営にあたってきた。合宿というコストの高い企画を実現するためには、福島大学の伝統や学内の協力体制が必要不可欠だろうと高森氏は述べる。

4. ルーブリック共同開発の過程

ルーブリック共同開発は、次の3つの過程で進められる。

①昨年度の共同教育プログラムの成果物に関するリフレクション

総合教育研究センター教員が中心となって、昨年度の共同教育プログラムの成果物、特に学生が提出したレポートについてのリフレクションが行われた。

この過程で、共同教育プログラムにおける学生の学びが、必ずしも能動的なものとならないままで、イベントや社会見学への受動的な参加に留まりがちであるという感触が得られた。

いかにすれば学生の能動性を引き出せるのか、またいかにすればそのノウハウを共同教育プログラムの教員で共有できるのか。このような観点から、共同教育プログラムの成果物を題材として、担当教員やプログラム参加学生による合宿型討論会が開かれることとなった。

②合宿型討論会による成果物の質に関する討議

合宿型討論会は、大きく二つに分かれている。前半はルーブリック開発に関する話題提供であり、ここで卒業生や外部講師によって社会が求める強い人材についてのイメージ等が語られる。後半はグループワークで、ここで教員・職員・学生の討論によるルーブリック共同開発が進められた。

本調査では、この過程に参与観察の形で調査を行った。具体的には、グループワークにメンバーとして参加し、その後、担当者等へのヒアリングを行った。

③外部講師によるルーブリックに勉強会およびルーブリック取りまとめ

その後、外部講師（弘前大学田中正弘氏）を招聘し、ルーブリックについての勉強会が開かれた。ここでの主眼はルーブリック開発についての方法論を整理することであったが、講師を務めた田中氏から、むしろ合宿型討論会によって関係者の声をルーブリックに取り込む試みについて高く評価され、合宿型討論会の方法論的な意味を再確認することとなった。この勉強会を踏まえた上で、討論の結果を総合教育研究センター教員が中心となってルーブリックの形に取りまとめることになっている。

5. ルーブリック共同開発の実際

(1) グループワークの過程

上述の通り、ルーブリック共同開発はグループワークの形で進められる。その過程は、図 4-2 の通りである。

まず試行（テストケース）として、学生が作成したパフォーマンス課題を多く集める。次に評価の際の観点について合意形成を行う。その後、合意された観点に基づき、複数名が学生のパフォーマンス課題を採点していく。採点にあたって、採点者はお互いの採点結果を見ずに独立して行い、採点結果を付箋紙等を用いて、メモしておく。

その後、それぞれのパフォーマンス課題に対して、採点者の採点を公開し、採点結果の共通性が高い課題をピックアップする。例えば、10名の採点者のうち、全員が尺度1と判断した課題がピックアップされることになる。これがその尺度における典型例となる。最後に、典型例の持つ特性等について議論し、それを記述語の形に落としこんでいくことで、ルーブリックが開発される。

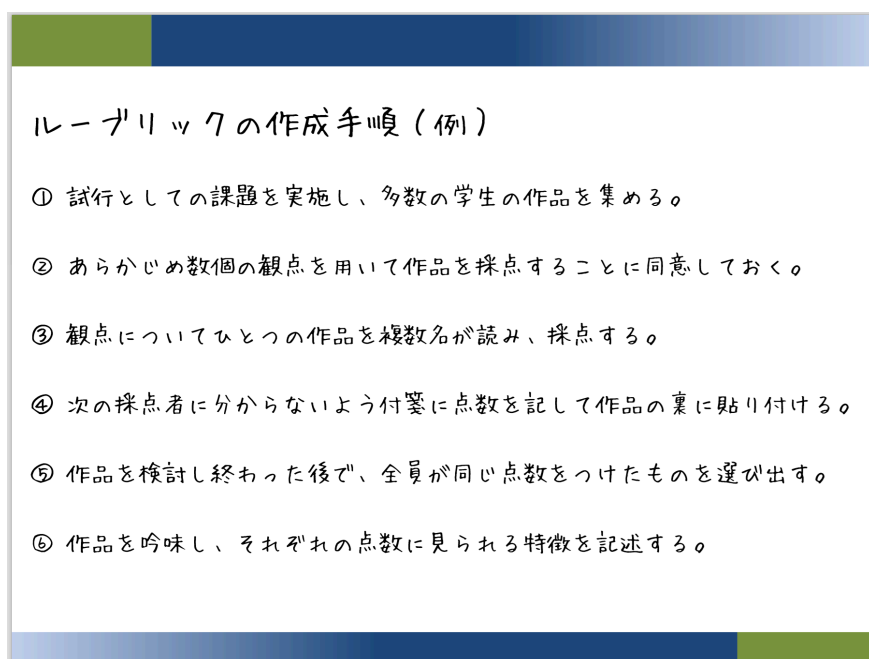


図 4-2 ルーブリックの作成手順

出典：当日資料より。

これらの過程のうち、当日のグループワークにおいて実践されたのは③～⑥である。より具体的には、カードの形でテストケースを配布し、①カードをレベル（尺度）ごとに分け、②どのような特性があるか検討し、③検討結果を模造紙にまとめ、発表するという過程が採られた。

また教員・職員・学生といった立場の異なる参加者の協働を実現するために、当日は議

論のルールとして①色々な立場の人がいても、遠慮しすぎず、自分の意見を伝える、②一人で長時間話すぎないように、相手の意見もよく聴く、③違いを恐れず、違いを非難せず、相手を否定しない、という3つが設定された。特に教員に対しては学生に対する教示を行わないよう、学生が突拍子もない発言をしたとしてもそれを無碍に否定しないよう再三注意が促された。

(2) レベル分け

レベルわけでは、参加者は個人を単位として作業を行う。参加者はあらかじめ配布されたカードをよく読み、その裏にそのカードのレベルを直観に基づいて記入していく。

ここではレベル分けのポイントなどはあえて説明されず、可能な限り参加者それぞれの主観性が反映されることが期待されている。



写真 4-1 グループ分け

(3) 特性の検討

特性の検討では、参加者の見解が一致した典型例をレベルごとに1つ取り上げ、その特性について自由に議論することが求められる。この議論により、主観的な意見が切磋琢磨

される中で、より客観性の高い見解が生み出されることが期待される。議論の結果が、ルーブリックに反映されることになるため、議論の活性化には細心の注意が払われる。

検討の段階では、まずグループ内部での議論の形で進められ、その後、グループ換えも行われる（グループホッピング）。初期グループの一人を残して、別のメンバーは他のグループの席へと移動する。その場で他のグループの作業状況や結果を聞き出し、その内容を自分のグループに持ち帰り、改めて議論を続ける。

このような様々な工夫を凝らしても、やはり多様な声を拾い上げることは容易ではない。グループワークの過程で、教員が学生に対して教示あるいは説話等を行うといった問題が散発することになった。ファシリテーションの経験のある人間が参加者にいない場合等については、司会を務めた丸山氏・高森氏がグループに入り、議論の整理等を行うこととなった。

あるグループでは、シニア教員と若手教員が同一グループに参加したこともあって、シニア教員の講話を若手教員がわかりやすい言葉に置き換えたり、シニア教員の話の切り上げを促したりと議論の整理を行うケースも見られた。このケースでは、学生たちの声をルーブリック共同開発の中に送り込むというよりも、グループワークを通して、教員の声を普段とは違った形で学生たちに届ける形で議論が進むことになった。

これらのケースから、教員・職員・学生といった多様な立場の声をルーブリックに反映させるには、相応の準備と時間がかかることが看取される。

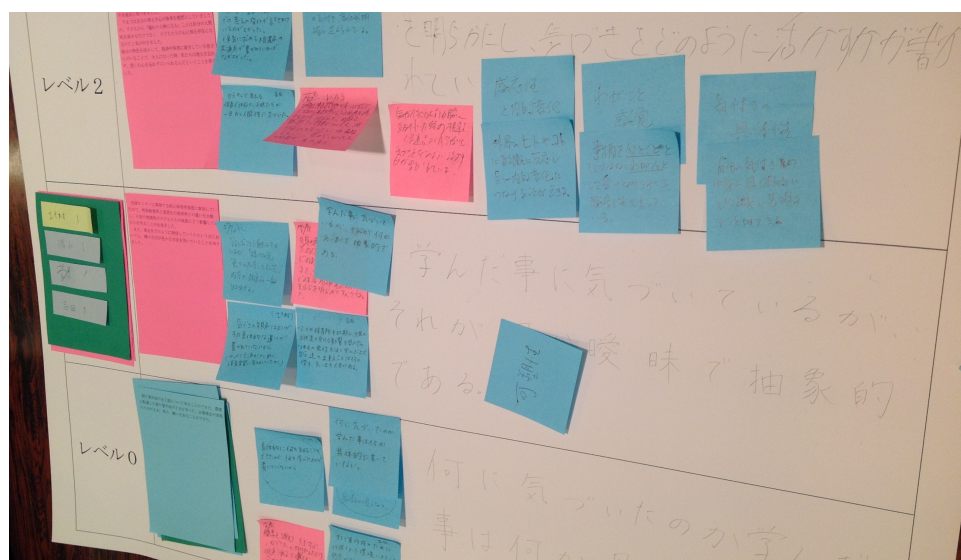


写真 4-2 特性の検討

(4) 発表

グループでの取りまとめは夜間を通して行われ、二日目に発表がなされる。発表内容は記録され、この結果が最終的なルーブリックのとりまとめの資料となる。